

大学研究プロジェクトにおけるグループ moblog の試み

慶応義塾大学 政策・メディア研究科 清水 愛子
aico@sfc.keio.ac.jp

0. はじめに

近年、大学における知識創造・伝達・共有のあり方を考える上で、実践的でインフォーマルな場で行われる学びへの注目が集まっている[1]。指定された時間に指定された教室で、教員が講義を行い、学生が知識を得るといった一方向的な学びから、教員と学生が相互に主体的に学び合う、実践の場への参加を通じてひとつの学習コミュニティを形成するような学びへの展開が行われている[2]。また、学習コミュニティの形成過程では、メディアの利用が盛んに行われており、メーリングリストや掲示板を活用した事例研究なども見受けられる[3]。特に、最近では携帯電話(以下、ケータイ)の普及が目覚ましく、学習環境における学生間の連絡などもケータイを中心に行われており、学習コミュニティの形成に与える影響が無視できなくなっていると考えられる[4]。

1. ktaifoto.net の試み

こうした背景をふまえ、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス(SFC)の加藤文俊助教担当研究プロジェクトでは、2004年4月より履修者と教員を中心メンバーとするmoblog(モブログ)サイト、ktaifoto.net を実験的に設置した(図1参照)。サイト上では、メンバーが日々カメラ付きケータイで撮影した写真をメールにて送信し、公開/共有しあり、投稿した写真は、投稿日時、投稿者名と共にサイトのトップページに掲載される仕組みになっている。



図1 ktaifoto.net トップページ

この取り組みの特徴として、以下の2点を挙げる。

・カメラ付きケータイというメディアの活用

ktaifoto.net では、場所的・時間的・心的制約の低いケータイというメディアの利用に加えて、ケータイ写真というヴィジュアル要素も取り入れている。そのため、これまで

教室や研究室などプロジェクトに直接関連する対面的な学習環境を中心に行われていた「見る/見られる」といったメンバーの関係性を、互いの日常にまで広げる試みであるといえる。

・インフォーマルな場の提供

ktaifoto.net へ写真を投稿する際、メンバーには特別なインストラクションやインセンティブを与えず、プロジェクトの履修単位とも関係のない活動としてこれを位置づけている。そのため、プロジェクトを取り巻くコミュニケーション環境の中では、図2で示すようなヴァーチャルでインフォーマルな場を ktaifoto.net が提供していると考えられる。

筆者は、プロジェクトに TA(Teaching Assistant)として関わり、ktaifoto.net のメンバーとしても直接参与しながら、学習環境におけるヴィジュアルコミュニケーションの実態調査を行った。



図2 「<場>のチカラ」におけるコミュニケーション環境分類

本研究では、約一学期間を通じてサイトに投稿された1500枚に及ぶ写真や参加メンバーへのインタビューを基に、定性的調査を行う。この試みを通じて、非同期にweb上で行われるヴィジュアルコミュニケーションが、リアルスペースにおけるプロジェクト活動と並列的に存在する事によって、メンバー間の日常生活の「見せ合い」はいかにして行われるのか、また、それがプロジェクトの構築・維持、学習の形態にどのようにつながっているのか、といった点について考察を加えていく。

2. 調査概要

2-1 調査対象

本研究では、ktaifoto.net を導入・開始した2004年4月20日から7月28日までの1学期間を対象に分析を行った。尚、調査期間中の「<場>のチカラ」研究プロジェクトにおけるメンバーのほとんどは、新規履修者であった。当時の活動概要としては週に2回の授業参加に加え、別途

グループワークが必修とされ、その他、フィールドワークや飲み会、履修とは無関係の有志によるサブプロジェクトなどが行われている。代表的な活動場所としては授業の行われる教室、グループワークや作業をする場として利用される共同研究室が、連絡手段にはメーリングリスト等が存在する。

調査期間	2004 年度 春学期(セメスター制) (4月20日~7月28日)
写真投稿枚数	1503 枚 (一日平均 15 枚 最高 101 枚 最少 1 枚) (投稿者別 平均 44 枚 最高 143 枚 最低 1 枚)
参加メンバー	担当教員、プロジェクト履修者 所属大学院生、過去履修経験者
内訳	学部生 19 名、大学院生 6 名、 教員 1 名、過去履修経験者 8 名 (学生 5 名、社会人 3 名) 合計 34 名

2-2 調査手法

本調査では、事例考察を行うにあたり、投稿されたケータイ写真を基本資料とし、34 名中 13 名のメンバーに対して半構造的インタビューを行った。概要は以下の通りである。

インタビュー時期:2005 年 3 月/教員は 2005 年 5 月
インフォーマント:調査期間中の参加メンバー 12 名
教員 1 名

インタビュー時間:約 1 時間半 / 回

インタビュー内容: ktaifoto.net の活動について/
カメラ付きケータイの基本的な利用状況について/
各ケータイ写真撮影時の投稿背景と心境について/
「『場』のチカラ」研究プロジェクトの活動について
など

尚、インタビューデータに関しては、逐語で文字に起し分析の対象とした。最終的に、写真データ、インタビューデータ、筆者のプロジェクト・ktaifoto への参与観察を通じて得たデータとを照合しながら考察を加えていくという方法を採用した。

3. 結果と考察

3-1 メンバーの同士のつながりを強化する機能

インタビューの結果、積極的に投稿を行っているインフォーマントも、また ROM(Read Only Member)として参加している投稿枚数のさほど多くないインフォーマントからも皆に共通して得られた回答として聞かれたのは、ktaifoto.net の存在でメンバー同士をよりよく知ることが出来た、という内容である。

インフォーマント A

Q: プロジェクトとの関係性の中で、ktaifoto.net の存在はどのようなものだったと思う?

A: バノチカ(プロジェクト名の略称)にとって(ktaifoto.net は)大きな存在だと思う。つながってられるのは ktaifoto があるから。休み中もみんなの生活はキャッチできるから安心。

Q: (あなたにとって)役に立っている感じがする?

A: うん、(まだプロジェクトに)溶け込んでなかったときも、他の人のこともよく分かった。どういう写真を送るかとか、猫を飼ってるでもそうだし、最寄り駅がどこかとか、どこら辺で活動しているとか(が分かった)。あとは、やっぱり何か(プロジェクトのイベント等)に参加しなくても、風景画(写真)をみることによって、(自分は)行かなかったけど、(そこで行われていた内容について)すごく分かるとか、自分はある程度発信してないけど、結構受信はしてるみたいな(感じがある)。

インフォーマント B

Q: プロジェクトとの関係性の中で、ktaifoto.net の存在はどのようなものだったと思う?

A: お互いがなにやってるのかっていうのの状況を見るのには役立ったとおもう。あいつが今どこで何やっているんだろうとか、[グループ名]だったら(フィールドワークのために)渋谷に来てますとか、(調査のために)図書館に来てる[グループ名](がいる)とか、見てる人たちだったら、そこで話の共有が出来ると思うんですよ。

Q: ktaifoto.net が無くなったらどうなると思う?

A: なくなったら急にな皆が何やってるか分からなくなっちゃう感じがする。

インフォーマント C

Q: プロジェクトに ktaifoto.net があったから変わったと思うことはありますか?

A: しばらく(メンバーと)会ってなくて、会った時にこういうことが何とかしてたでしょ? みたいな感じで情報を共有出来るっていうか、会わない間も、私はこういうことをしててって言う、生活みたいなものがある程度見えている部分で、いい影響はもたらしているんじゃないかなと思う。(投稿写真が)話のきっかけになる事は多い。そこから情報を仕入れているとか。

以上の回答からは、ktaifoto.net が、プロジェクトメンバーにとって、フェイス・トゥー・フェイスのコミュニケーション(FTF)を補う役割を担っているということが分かる。また、学校外で行われるプロジェクト活動や、互いの日常生活における出来事の報告など、メンバー同士が会わない時間を埋めるための機能に重点がおかれているように見受けられる。特に写真によって相手の状況をほぼリアルタイム

ムに詳細に把握可能であるという点がメンバー同士の紐帯としての機能をより強めていると考えられるのではないだろうか。

3-2 作法の生成と伝播

ktafoto.net 上では、似通った状況で撮影を繰り返す投稿写真のシリーズ化や、現状の変化を時系的に報告する「実況中継」、イベント等の準備段階を事前に撮影し、後から報告する「ネタバレ」といった作法が徐々に出来上がって、広まったという経緯がある。

例えば、あるメンバーがミキサーを購入した際、それを他のメンバーに報告するため、家でミックスジュースを作っている風景と、出来上がってコップに注がれたジュースの写真を対にして投稿した。これが、他のメンバーの目につき、FTF で話題にあがり、結果としてそのメンバーはミックスジュースを作るたびに写真を撮影し、投稿するというシリーズ化を始めるようになった。最終的には、ミキサーを共同研究室に持ってきて、ミックスジュースの実演が行われる程にまで、メンバーに定着したという経緯がある。(図 3)



図 3. ミックスジュースシリーズの投稿写真

こうした作法を生成しているのは、主にプロジェクトに積極的に活動し、写真の投稿も頻繁に行っているメンバーである。だが、一方で、それが伝播し定着する過程においては、共同研究室や飲み会などのリアルでインフォーマルな場におけるコミュニケーションが深く関わっていることが見て取れる。個人あるいはグループでの体験が、ktafoto.net への写真投稿や、それに関する話題としてインフォーマルな場で再共有され、その中で作法の伝播が行われているのである。このことから、メンバーは ktafoto.net と FTF が並列的に存在する中で、互いの紐帯を可視化しあうことに成功し、所属している学習コミュニティの一員だという意識を高めているのだと考えられる。

3-3 アーカイブとしての認識の違い

一方、インフォーマントの回答に意見の差が見受けられたのは、ktafoto.net のアーカイブとしての公共性に対する認識についてである。

インフォーマント C

Q: ktafoto.net の自分の生活の中での位置づけを教えてください。

A: 日課みたいな感じになって、自分の記録の代わりになって、それがたまっていって、どんなのを自分がとったのを見られるから、いいかなって思う。

インフォーマント E

Q: 自分の日々の記録が他の人に見えてしまうことについてはどう思いますか？

A: 私はいいんじゃないかと思う。普段の生活でも話してしまうので、それと同じ感覚。日常会話で話すのと同じようなネタを、ちょっと見てよ。って画像付きで(やっている感じ)。撮った写真はほとんど送っている気がする。

以上の回答は、日常の私生活における写真も多く投稿していたインフォーマントによる回答である。彼らは、個人的なアーカイブとして ktafoto.net をとらえ、個人のサイトに送るような感覚で写真を投稿する傾向にある。しかし、一方では、ktafoto.net をプロジェクトの公共的な共有アーカイブとしてとらえているというインフォーマントの意見も見受けられた。

インフォーマント A

Q: 自分の日々の記録が他の人に見えてしまうことについてはどう思いますか？

A: (日常生活の写真とかは)皆にむけて、わざわざ送るには自己満(足)すぎると思う。

Q: 自分の moblog と比べて、ktafoto.net では個人的な趣味志向は出していない？

A: うん。(プライベートの moblog とは)見せる自分が違う。

インフォーマント F

Q: 写真を送った背景を教えてください。

A: 基本的に、パノチカで何かをしている時とか、共通の話題とかが多いと思う。

Q: 日常生活を送ることに對してはどう思う？

A: 自分の行動をアピールするのは後ろめたさはある。自分ひとりで(パノチカに)何も関係なかったら送らない。何かしら、パノチカとの関連性の中で送ってる。

以上の結果は、各インフォーマントの撮影場所や撮影人物など、写真の内容からも読み取ることができたものであるが、これは各自の ktafoto.net に対する参加の仕方や認識の違いの表れとして考えることが出来るだろう。更には、これまでの議論を踏まえると、FTF における「<場>のチカラ」への認識の差、及び、参加の形態の違いとも連動していると考えられるのではないだろうか。

3-4 参加の4種類

そこで、より具体的にインフォーマントの ktaifoto.net への参加の形態を理解するため、各人の投稿枚数と、3-3 でふれた ktaifoto.net へのアーカイブとしての公共性に対する認識とを参加度合いの指標としてとらえ、図4のように対応させた。その結果、以下の4つのグループとして分類可能であることが分かった。また、これらの分類は、以下に示す通り、参与観察や各種データの中で観察されるプロジェクト内のメンバー間における役割関係ともほぼ合致する結果となり、非常に妥当なものとなった。

	公共的アーカイブ	個人的アーカイブ
投稿枚数 多い	グループ2 記録/伝搬型 (日誌的)	グループ1 創発/談話型 (日記的)
投稿枚数 少ない	グループ3 表明/独言型 (回覧板的)	グループ4 目的/相槌型 (交換日記的)

図4. ktaifoto.net における参加の4種類

グループ1は ktaifoto.net への投稿や閲覧が日常化しており、プロジェクトに対して積極的な参加と情緒的な感情が見られるインフォーマントである。個人的な写真の投稿が多く、作法の生成は彼らを中心に行われてきた。いわば「創発/談話型」のグループといえるだろう。

グループ2も比較的枚数が多く、プロジェクト活動に積極的だが、別に所属するコミュニティも存在し、相互の線引きを意識する傾向にあるため、写真の内容は皆が共有できるプロジェクト内の出来事が中心である。また、彼らは新しい投稿作法にすばやく対応し、他のメンバーに広める伝搬役として存在しており「記録/伝搬型」といえる。

グループ3は、プロジェクト以外のコミュニティに積極的に従事しているため最低限の参加としての投稿が時折、唐突に行われる。プロジェクト行事への参加頻度も少ないため、障りのない個人的な写真が中心で、周囲の話題に乗るためというより参加の意思表示として投稿する「独言/表明型」のインフォーマントである。

グループ4は、専らROMとして参加しており枚数は少ないが、各自のペースで定期的に日常生活写真を投稿している。彼らはプロジェクト活動に明確な目的意識を持ち、ktaifoto への投稿もその一環としてとらえている「目的/相槌型」である。

また、これらをふまえると、作法の伝搬は図4におけるグレーの矢印で表すことができ、各インフォーマントグループの ktaifoto.net のアーカイブとしての認識は、それぞれ「日記的」「日誌的」「回覧板的」「交換日記的」と考えることが出来るだろう。

以上を概観すると、ktaifoto.net の導入は、「<場>のチカラ」プロジェクトという学習環境における参加の形態を新しい形で可視化・再生産したといえる。

4. まとめ

本研究では、ktaifoto.net の「<場>のチカラ」プロジェクトへの導入により、インフォーマルな場におけるプロジェクトメンバーの活動をより可視的にする試みを行い、いかに学習環境の構築・維持・再構築が行われるのかといった観点から定性的な手法を用いて分析を行った。結果、メンバー間の「見せ合い」はインフォーマルでヴィジュアルなコミュニケーションとして、FTF を補う役割を担い、さらに作法の生成による連帯感の高まりをもたらした。また、メンバーの ktaifoto.net への参加の形態は、同時に FTF におけるプロジェクトへの参加様式との関連性の中でも理解でき、今回のケースではフォーマルでバーチャルなコミュニケーション環境として利用されていたメーリングリストなどとは違った形の新しい参加の指標としても考えられるだろう。特に3-4で示したように、あたらしい参加の形態を可視化し、その中でメンバー間の学習コミュニティにおける関係性の維持・再構築をめぐる作法の生成と伝搬が行われた。これは、インフォーマルな関係性を基礎とした学習環境の構築に関するひとつの可能性を示していると考えられるだろう。

今回の報告では、主にセメスター制における春学期のみのデータを利用したものだが、データの取得及び聞き取り調査は継続されている。今後は、夏期休暇中や新規履修者の参加を経た秋学期における ktaifoto.net 内のコミュニケーション分析、及びこれに関連した学習環境の展開などについて分析していく予定である。

<注・参考文献>

- [1] エティエンヌ・ウェンガー リチャード・マクダーモット ウィリアム・M・スナイダー 「コミュニティ・オブ・プラクティス ナレッジ社会の新たな知識形態の実践」 櫻井祐子訳 翔泳社、2002
- [2] 上野直樹「仕事の中での学習 -状況論的アプローチ-」 東京大学出版会、1999
- [3] Kato, F. and Tachibana, K. (2004) Project facilitation through computer-mediated communication: An exploratory study on collaborative research projects. Presented at the 2nd International Conference on Project Management (ProMac2004) October 12-14, 2004, Makuhari, Japan.
- [4] Okabe, Daisuke. (2004) Emergent Social Practices, Situations and Relations through Everyday Camera Phone Use. Paper presented at Mobile Communication and Social Change, the 2004 International Conference on Mobile Communication in Seoul, Korea, October 18-19.